

シリーズ大学入試改革①

入試は
どう変わるか

Guest commentator



生駒俊明

日本テキサスインスツルメンツ前会長・東京大学名誉教授・中央教育審議会大学分科会臨時委員。経済界での経験や大学での経験を踏まえて大学問題について積極的に発言。

Guest commentator



橋爪大三郎

東京工業大学教授。社会経済性生産本部の委員会の委員として、大学入試廃止など新たな教育改革論を提示した。共著に『選択・責任・連帯の教育改革』。

大学入試が大きく変わろうとしています。

2004年からほとんどの国立大学が試験科目を増やし、5教科7科目にすることにしています。さらに、2006年からは、英語のリスニングテストの導入が検討されています。大学の講義を理解できる基礎学力をもった学生を入学させるためです。

ペーパーテストだけでなく、面接などで学習への意欲をみるAO入試も広がっています。2002年にAO入試を取り入れた大学はおよそ300。全大学の半数近くにのぼりました。

■学力の面から見た入試改革

今後大学入試がどう変わるのか、そしてどのような学力が求められていくのかをみていきます。ゲストは日本テキサスインスツルメンツ前会長で東大名誉教授の生駒俊明さんです。

生駒さんは、半導体メーカーの経営者と

しての経験を踏まえ、中央教育審議会の大学分科会の臨時委員として大学の改革について提言をされています。生駒さん、なぜ大学の入試改革が今必要になってきたのでしょうか。

生駒 今、社会が大きく変わろうとしています。キーワードが多様化と個性化。そのなかで大学自身が変わりつつあります。それに応じて大学入試も変えていかなければいけないということです。

社会がそういう形を求めているのですね。生駒 そうです。

もうひとかたご紹介しましょう。東京工業大学教授で社会学が専門の橋爪大三郎さんです。橋爪さんは、独自の大学入試改革論を提唱していらっしゃいます。やはり大学の入学のあり方を考えるということ

は、教育にかなり大きな影響を与えますね。橋爪 そうです。今のよう大学入試は必要ないと思います。必要ないばかりではなくて、高校以下の教育を大きくゆがめています。大学入試のあり方が変われば、教育全体の機能を回復できると期待できます。

まず、学力の面から入試がどう変わっていくのかを考えていきます。今話題になっているのが、大学の講義についてこれない、講義を理解する学力を学生が持っていないのではないかという点です。学生の学力について、国立大学の学部長に調査した結果、全体の半数近くが「大学での学習に必要な基礎科目を習っていない」と答えています。

大学生の学力が低下しているのではないか、という指摘もあるなかで、全国でおよそ500の大学が利用している大学入試センター試験が変わろうとしています。

現在の入試制度は、私立大学ではセンター試験を受けず個別試験だけで選抜している大学もありますが、すべての国公立大学と一部の私立大学では、まずセンター試験を受けて、そのうえで個別試験を受けています。

国立大学の場合、これまで5教科6科目をセンター試験で課すところが多かったのですが、2004年からは8割以上の国立大学で5教科7科目を受験させます。社会や理科が増えたわけです。また2006年からは英語のリスニングテストの導入が検討されています。こうした改革の動きについて生駒さんはどうご覧になりますか。

生駒 私は科目数が多いとか少ないで議論するのではなく、むしろ学生が大学に入って勉強するうえで十分な学力をもっているのかどうかを確かめるというテストにして、そのテストは学部や学科によってバラエティがあつていいと思います。

ただ重要なことは三つあります。一つは英、数、国という基礎学力です。基礎学力はしっかりやってもらわなくてはいけない。二つ目に知識を試す問題、三つ目は考える力を試す問題です。この三つをうまく組み合わせた入試にすべきだと思います。

— 今の入試は、その三つのバランスが、うまくいっていないということですか。

生駒

— そうです。記憶力だけに頼るテストが多いのが問題だと思います。

— また、学生の論理的思考力、表現力が弱いという指摘もあります。

— 全国の国立大学の学部長を調査した結果では、今の学生の論理的な思考力、表現力について、「弱い」と答えた学部長が85パーセントもいました。橋爪さん、これについてはどうお考えになりますか。

橋爪

— 無理もないと思います。論理的思考力、表現力を、今の入試で測るのは無理です。それよりも本来なら、高校時代に思考力に磨きをかけるべきです。

— 思考力や表現力を評価するしくみを、入試とは別に考えるのが本筋だと思います。

橋爪

— やはり入試という制度があるかぎり、論理的な思考力などをみるのは難しいということでしょうか。難しいです。むしろそれを阻害する原因になっていないでしょうか。

— 大学に入る前の高校の勉強の時点で、思考力や論理的な考え方は必要ないということになってしまっていますね。

橋爪

— それでも入試は通ってしまうのです。

— なるほど。すると学部長は、自分たちが期待してとった生徒の中に、意外と表現力や思考力がないなという、アンケート結果の85パーセントという数字になってくるのですね。

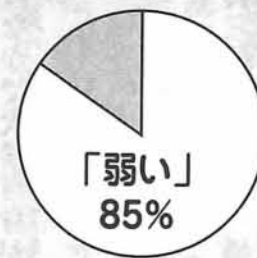
橋爪

— 当然だと思います。そこで、知識偏重ではなくて、思考力を試そうとする新たな入試問題が出されるようになってきています。それが「総合問題」といわれる問題です。総合問題とは、従来の科目の枠を乗り越えた、基礎的総合的な思考力を問う問題とされています。

— たとえば、去年の横浜国立大学教育人間科学部マルチメディア文化課程の入試では、次のような問題が出されました。

(問題紹介) 左はデューラーの自画像。右は同時代のミケランジェロがローマシ스티ナ礼拝堂に描いた「最後の審判」の一部である。右下部分に人間の抜け殻のように描かれているものは、ミケランジェロの自画像だと言われている。デューラーの自画像と比較して「自分を描く」という態度にどのような違いがあるかを150字以内で述べよ。

大学生の思考力・表現力



国立大学部長アンケート

生駒さん、問題についてどう思われますか。

生駒 面白い問題です。正解が何なのか聞いてみたいです。一般に、こういう総合問題というのは、私はよいと思います。正解が必ずしも一つでない。思考力を試すという問題ですね。ただいくつか注意しなくてはいけないことがあります。一つは採点に主観が入るということです。やはりこれからの社会には、採点の際に主観が入ってもよいという考えを受け入れる風土が必要になってくるでしょう。もう一つは、受験技術で解決できない問題、これを問うことによってほんとうにその学生さんの能力が試せます。これはとてもよいことです。

受験技術で乗り越えてしまうような入試制度は、一つの問題です。すね。

生駒 今はそれが大きな弊害だと思っています。

客観性、公平性があまり必要ないというのは、どういことなのでしょう。

生駒 それは、やはり大学がほしいと思う学生、大学が望むような能力を持った学生を受け入れるということです。人格まですべてがジャッジされるわけではないですから、そういう大学の志向が少しあってよいと思います。

なるほど、大学が、自分たちがほしいという主体性ですね。

生駒 大学の主体性を重んじるということです。

とすると、こういう問題はもっと増えたほうがよいということでしょうか。

生駒 そうです。例にあがった問題自体がいいかどうかは別として、思考力が試されるような総合問題です。

——実は、大学入試センターでも、総合問題について研究しています。番組が独自に入手した例題があります。思考力という点ではちよつと違うのかもしれませんが、科目を横断するということか、科目をいろいろと合成させた能力が必要となってくる問題ではないかと思っています。

国語と英語をミックスさせたような形の問題ですが、日本語のほうには殺人事件のストーリーが書いてあります。そして殺人事件の内容を理解した上でそれを受けるような形で、漫画のストーリーが展開しています。漫画のストーリーのせりふの部分は英語で書かれています。英語のせりふの部分が一部あいていまして、その部分にはどういふせりふが必要かというのを四択で選ぶという問題です。これはあくまでも研究している段階の問題ですが、こういう形でいろいろな総合的な問題が研究されているところです。

入試のいろいろな問題が研究されていますが、生駒さん、大学を希望する生徒に求めている学力というのはどういうものなのでしょう。

生駒 まず第一に英、数、国、これは基本的な学力としてすべての高校卒業生にある一定レベルを保障していただきたいと思っています。そのうえで、大学でどういう勉強をするかということに立って基本的な知識があるかどうかを試す。いちばんの問題は、今の高校生の、教えられたことは知らなくてはいけな、ただど教えられないことは知らなくていいという考え方です。これは学習指導要領で非常にきつく縛られているというこ



国語と英語をミックスさせた問題



デューラー (左) とミケランジェロ (右)

ともあると思いますが、やはり意欲のある学生はどんどん勉強して、きちんと評価されるようなシステムが必要だと思います。

――基準が試験に出るか出ないか、特に高校生は、これ試験に出ないから勉強しなくてもいいや、みたいなところがあります。そうすると社会で求められていることと結び付いていかなくなります。

生駒 社会は、やはり自分から考えて行動することを求めています。積極性がいちばん大事です。中学、高校のときから思考力や積極性を身につけておくと、それがこれからの入試でも培われることになります。非常に大事なことです。

――思考力が必要だということ、そういう力をどうみていくのかということになるわけですね。橋爪さんはいかがですか。

橋爪 思考力とは何か。たしかに大事な力ですが、じつはそれは従来、日本がやってきた教育方法のなかにもあります。詰め込みと言われていましたが、それと矛盾するものではないと思います。たとえば掛け算の九九を考えてもいいのですが、思考力は、簡単なことは考えないで済む、大事なことだけ考える、こういう能力だと思います。小学校の低学年の間に、知識と基礎的なスキルをしっかり身につける。このうえに思考力が育つと思います。思考力を重視すると、ともすれば詰め込み反対ということになりますが、これでは思考力は育たないと思います。大学入試の時点で要求されるものは、基礎的なスキルと思考、この二段階が必要になるのではないのでしょうか。

――大学を受ける時点で子どもたちは、基礎的な部分、そして、プラスのところもある程度身につけておいてほしい、ということですね。

橋爪 そういうことです。

――ではやはり小、中学校の基礎的な部分は、むしろ詰め込んだぐらいのほうがいいということになるのでしょうか。

橋爪 その基礎がとても大切で、一生にわたって使う可能性が高いものについては、遠慮なくきちんと教えこんだほうがよいのです。それが思考力も一緒に育てると思います。

――なるほど、基礎の上に立った思考力ということですね。

――これまで学力の面から入試改革についてみてきました。

■やる気ある学生を集めるためには

――さて、もうひとつ問題になっているのが、大学入学後に学習する意欲の乏しい学生が多いことです。意欲の部分です。

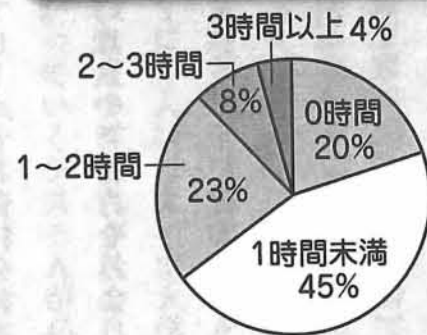
――全国の学生およそ3万人を対象に、講義を除く1日の勉強時間について調査した結果です。

――講義以外は全く勉強しない学生は20パーセント。1時間未満が45パーセント。つまり65パーセントの学生が講義以外では1時間未満の勉強しかないというアンケート結果が出ています。

――そこで学生がこれまでに学んだ知識の量ではなくて、大学に入学した後の意欲をみる新しい方法の入試が広がっています。

――どうすれば、意欲のある受験生を入学させることができるのか。大学がまず重視するのは、受験生から送られてくる何を学びたいのかを書いた書

大学生の勉強時間(1日)



高等教育学力調査研究会調べ

類です。また、高校時代に打ち込んできたことや、関心を持ったことなど、自分をアピールする資料を参考に
する大学もあります。

これらの書類に担当者が目を通すことで、ペーパーテストではわからない受験生の意欲や考え方をみようとして
います。

さらに、意欲をみるために多くの大学が重視しているのが面接です。志望理由を直接受験生に確かめたい
で、人柄や個性を見極めようとしています。

こうして手間と時間をかけ、入学してから積極的に学ぼうとする人材を求めているのです。

—— こうした入試はAO入試と一般に呼ばれています。2002年にこの入試を取り入れた大学は、3
00校近くにのぼっています。

橋爪さん、このAO入試をどのようにご覧になりますか。

橋爪 本来のAO、つまりアドミッションオフィスとは、入試はやめて、アドミッションオフィスという
事務所が、入学者を全部書類選考で決めようというものです。そのためにはまず手紙でいろいろなものを送っ
てもらいますが、送られてきた書類を全部読んで会議を開いていろいろ議論した結果、この人には先に合格
通知を出しましょう、でも入学するかどうかわかりません、では次はこの人というふうに、やっていくやり方
のことです。日本のAO入試は、そういうものではなくて、今までの推薦入試が看板を掛け替えただけで、ま
だまだ高校までの学習意欲をみてとるというシステムには、ほど遠いのではないかと思います。

—— これはアメリカではかなり進んでいるものですね。

橋爪 ほとんどの大学がこのやり方をとっています。アドミッションオフィスのスタッフは、意欲のある
学生をとるために高校を説明にまわります。2年生の学生に話しかけて、記録をとってそのあとも連絡をして、

ぜひ受けてくださいと、声をかけます。高校生は大学の授業を聞きに行ってもいい。高校と大学が一体となっ
た共同作業なのです。日本のAO入試はそのずーっとまだまだ手前の原始的な段階です。

—— 生駒さんいかがですか。

生駒 AO入試そのものはいいいと思いますが、問題はその中身です。社会で必要なのは学力だけではなく
て、指導力や協調性、行動力、それから他人を思いやる心など、いろいろです。だから、それをみて入試を変
えるというのは非常によいと思います。ただ学生さんから上がってくる書類をジャッジするのではなく、むし
ろ大学側が、うちはこういう人材を育てるから、こういう素質を持った人がほしいんだということを発信して、
AOによって選抜をするのがいいと思います。

—— 入試の一つの分野というよりも、AO入試は根本的に考え方が違うわけですね。

生駒 学力ではなくて人間性、人格や適性などをみて、ほしい人をとるという方法は、おおげさに言いま
すと私立の大学が将来存続できるかどうかということがかかっていると思います。

—— そうすると高校で勉強してきたことがそのまま大学でも結び付くと思うのですが、大学に入っ
てから、意欲のない学生がかなり多いという指摘もあります。意欲を保ったまま大学生活を送れるように、大学が
生徒を受け入れるためには、入試という点ではどうかたちが必要になってくるのでしょうか。

生駒 入試にパスするというのが高校生目的になってしまっています。パスすると今度は自分のターゲ
ットを失ってしまいます。やはり高校の教育と大学の教育がうまく連続していくように、入試によって大学で
学ぶための知識を試す、そうすると高校教育で習ったことが大学に行ってそのまま役に立つ、それが社会に出
てからさらに役に立つ、こういう中学、高校、大学、社会というのが一貫してつながっていくシステムが必要
だと思います。

——— そのためいちばん重要な点はということでしょう。

生駒 学習指導要領に決められて、偏差値というもので学力を測るよりは、大学が必要な知識というものを入試でどんどん聞くことが重要です。高校教育は少し混乱するかもしれませんが、この大学はこういう特徴を持っているんだ、こういう人材がほしいんだというメッセージを大学が発信して、それに入試を使うというのは非常に大事です。

——— 橋爪さんはどうお考えですか。

橋爪 学習指導要領と無関係に、大学が必要としている知識を要求すればいいと思います。ただ、すべての大学がそのシステムでいいってもいいかというところ、少し疑問です。入試に変えてどのような方法をとればいいのか。一つは、AO入試ではなくて、AO入学です。これを本道にすべきだと思います。入試というかたちで学生を縛る必要はありません。入試があるといういろいろ弊害があります。まず偏差値。自分の偏差値はこれくらいだから、この大学に行こうか。そこから先のことは考えない、そんな人が増えてしまいます。

——— 今はほとんどそうです。

橋爪 それは困ったことなのです。AOシステムというのは、自分はこういう理由でこの大学に行きたい、大学側はこういう理由でこの学生をとりたい、それを相談して決めていくやり方です。必要な学力証明は高校生が自分です。この大学はこれくらいの学力を求めているのだから、私は必要な学力をつけてそこに入学しましょう。それは自己責任だ。こういう積極性を育てることが、AOシステム、AO入学です。

学力証明のためには、入学試験ではなくて、資格試験のようなものを開発すればよいと思います。たとえば物理は、高校の課程は全部マスターしました、大学の課程もちょっとできますというような試験を用意してくれば、それをパスして学力証明にできます。英語ならTOEFLみたいなものもいいかもしれません。こう

いうやり方にすれば、今よりもずっとよいシステムになるはずですよ。

——— 冒頭で橋爪さんがおっしゃったように、入試そのものをなくしてしまうという点では、AO入学一本化ということも方法としてはあるという考え方なのでしょうか。

橋爪 入試で入学者を決めている国は、確かにアジアにはいっぱいありますが、アメリカをはじめとして、入試なんてないという大学も多いのです。でもきちんと適切な人材を集めている。それを選択肢に入れてじっくり研究するというのを、日本はやらなければいけないのではないのでしょうか。

——— すると大学に入ってから勉強もかなり厳しくなってくるわけですね。

橋爪 入学はある程度今よりゆるくなりますから、そのかわりに進級、卒業が厳しくなるということです。学力がきちんと伸びていかなければ卒業できないというのは、当然のことです。ここをしっかりとやらなければならないと思います。

——— 生駒さんいかがでしょう。

生駒 おおむね賛成です。意欲をかきたてるには、もうひとつは社会側が何かしなくてはいいけない。特に企業が一律で初任給を決めたりしないで、非常に能力の高い学生には初任給をたくさん払うとか、自分の会社に必要な人材は高い給料を払っても採用する、こういう競争が社会で働けば学生はまたやる気を出すでしょう。アメリカはずっと前からそうやっています。日本も同様にやっていかなくてもいいけないのでしょうか。

——— これまでよく言われてきた平等性は、社会側も大学側も、もうあまり固定観念にとらわれる必要はないということですか。

生駒 平等というものの考え方です。個性に応じて能力に応じて機会が与えられる、これがほんとうの意味の平等です。こういう考え方に社会がなっていけば、日本はもう少し国際的な競争力を復活するのではない

かと思っています。

——大学の入試が変われば、やはりいちばん大きな影響が高校にもあると思います。

生駒 高校は、考える力それから自己表現能力、とくに自己表現能力は欠如していると思います。この部分を高校、中学から身につけさせるような教育が大事です。

——それができるわけですね。

生駒 はい、文部科学省が決めた学習指導要領だけで教育をしないで、現場がどうやったら学生に表現能力をつけさせられるかという工夫をして、現場でお互いに勉強しあうようなことをどんどんやったらいいでしょう。

——今は表現力や思考力を身につけさせようという余裕が高校の3年間ではないですね。

生駒 要するに入試が記憶に頼るという部分がありますから、できるだけ効率よくそれをパスしようという考え方で、教育をしてしまっているのです。

——橋爪さんはいかがですか。

橋爪 大部分の高校が入試のための教育機関みたいになってしまっている。そういう現場の実情があります。それから大学入試と無関係の高校の多くは、教える側も教わる側も目標を失って、無意味に3年間を過ごしているという実態もまたあります。基礎学力はしっかり身につけて、そのうえで、将来の進路に応じて、大学に行く人、就職する人、専門学校に行く人、それぞれの生き方がありますから、その生き方をしっかり支援するカリキュラムを、高校としても開発していく努力が必要です。今は大学の入試実績が上がると、それ以上求められませんか、高校は実際に生徒の役に立つことを教えているのかということを問われません。入試がなくなればやはり生徒の生き方を支援できたかどうかということが、高校に問われるわけです。これがやはり、

高校教育の改革の柱になると思います。

——今の段階の高校はとにかく卒業させてしまえば、みたいなところもありますし、どちらかというと偏差値の高い大学に入れていけばよいという考え方です。

橋爪 それでは済まない。そうではなくて、生徒の将来を支援するという目標に、はっきり変えたいと思います。

——社会は教育の改革を求めていると考えてよいでしょうか。

生駒 そうです。ただ、注意しなくてはいけないのは、英、数、国、これは基礎学力ですからしっかりとやるべきです。入試がなくなっても、資格試験なりやはり一定の保証をしてもらう必要があります。

——学力のある程度の保証をした上で、次に進むということですね。

生駒 そうです。

橋爪 私の提案は、その学力の保証を高校の資格試験というかたちですべての高校生に課したほうがよいというものです。

——なるほど、高校の資格試験。

橋爪 はい、大学入試は高校生の半分しか受けないわけですから。

——高校での資格試験を全員が受けて、その上でやりたいことをやり、能力をさらに大学で伸ばしていくということですね。

橋爪 そうです。

——今日は大学入試のあり方が変わっていくなかで、今後、生徒たちにどのような学力が必要になってくるのか、高校に何が求められてくるのかをみてきました。

(2003年1月9日放送)